

大郷町教育委員会所蔵の3体の明王像について

見 田 隆 鑑

はじめに

本稿は、宮城県黒川郡大郷町の大郷町教育委員会が管理する計7体の木彫仏のうち、特に3体の明王像および明王形尊像について論ずるものである。

現在、大郷町教育委員会では、僧形立像2体、菩薩形立像2体とともに3体の明王像、宝珠と思われる持物を持つ左手部分（手首から先）が管理されている【写真1】。

これらの尊像は、同町鶉崎にある薬師堂【写真2】の軒下から発見されたものと伝えられているが、同町在住の高橋辰雄氏からの聞き取りによると、昭和25年に茅葺きで崩れかかった薬師堂が再建された際、堂内に置かれた木彫像は軒下に入

れられ、調査で再び発見されるまでの間、そのまま放置されたということである。また、再建前の薬師堂では、仏像は床に置かれた状態で、高橋氏は子供の頃に小さな像を持って遊んだ記憶があるという。

特に、写真1の左側のケースに収められている4体については、『大郷町史』¹⁾では黒川郡の郡衙が置かれた鶉崎に存在した寺院・大小寺に関する古仏に推定される仏像としてモノクロの写真資料が紹介されている。また、おおさと歴史探訪会代表・柴修也氏によるブログ²⁾を通して情報が発信されている他、平成23年に仙台市博物館で開催された特別展『仏のかたち 人のすがた 仙台ゆかりの仏像と肖像彫刻』³⁾では、僧形立像1体



【写真1】大郷町教育委員会が管理する木彫像



【写真2】現在の薬師堂（平成24年8月23日撮影）

と菩薩形立像2体が出展され、その展示図録の解説でも「また出品された三軀の他に薬師堂伝来という小型の五大明王像数軀と僧形立像一軀が伝えられていることを付け加えておく」という記述に本稿で扱明王像の存在が指摘されている。

ただし、特に明王像に関する詳細な情報は、現在のところ十分に活字化されてはならず、本稿では筆者の実地調査をもとに現状で得られる可能な限りの情報を活字化し、写真資料の紹介も合わせ、尊像に関する若干の検討を加えていきたい⁴⁾。

1. 各像の情報（法量・形状・品質構造・保存状態）

3体の明王像は、他像と同様に、いずれも朽損やシバンムシによる虫損が著しく、面貌など細部の造形は十分に把握できない状態である。しかし、過去の修理で樹脂含浸が施されたことにより、その段階以上の著しい劣化は今の所ないようである。

この3体も、中型の3体の僧形・菩薩形の立像⁵⁾と同様に薬師堂軒下に放置されていたため、このような保存状態であることは致し方ないことと言え、むしろこれらの像を改めて見つけ出し、町として保管されたことを評価すべきである。ただ、現状でも木地が露わになっている部分があり、その部分は非常に脆く、若干木粉が落ちるような状態のため、現状維持の適正な管理が求められる。

これら3体の明王像は、当初は五大明王を形成する尊像であった可能性が考えられるが、うち1体は国内における一般的な五大明王の構成尊像とは異なる姿を呈しているため、本稿ではこの像を〈名称未詳明王形立像〉と呼ぶこととする。

まず、各像の法量と形状、品質構造および保存状態をまとめておきたい。

① 不動明王坐像【写真3～7】

〈法量〉

像高 28.9 cm（現状） 髪際高 24.3 cm
頭頂-顎下 10.5 cm 面幅 6.3 cm 面奥 7.6 cm
面長 5.8 cm 耳張 8.1 cm
胸厚（中心） 6.6 cm 腹厚（中心） 7.5 cm
坐奥（現状） 7.2 cm

〈形状〉

正面を向く一面二臂の坐像。頭頂部に角柄の突起（高さ 1.1 cm）をあらわす。面貌の詳細は不明だが、両目開眼相と思われる。頭髪は総髪を梳り、左耳前にやや捻りながら垂下するが、紐での括りは現状では確認できない。辮髪の下端は体部に彫出されている。耳朵は環状で貫かない。頸・胸部・腹部に括りを刻む。着衣は条帛、腰布、裙を身につけるものと思われる。装身具は現状では右腕の臂釧のみが確認できる。

〈品質構造〉

ケヤキ材の一木造。内刳りなし。頭体幹部を一材から彫出し、この体幹部材に左肩以下（ただし左肩部は折れた可能性があるため、右腕同様に肘部までは一材であったのではないかと思われる）、右肘先、膝前部を矧ぐ構造か。右肘先と両膝矧ぎ付け部の左右にそれぞれ柄穴が確認できる〔柄穴（右膝部）1.5 × 2.5 cm 柄穴（左膝部）1.6 × 3.0 cm〕ことから、この部分は別材を寄せていたことがわかる。

〈保存状態〉

現状、左肩以下、右肘先、膝前部は欠失している。また、頭頂部の頂蓮（か）を形成する材料および辮髪遊離部を欠失する。表面は素地を呈し、彩色などの痕跡は確認できず、朽損・虫損が著しいため樹脂含浸が施されている。

② 大威徳明王像【写真8～12】

〈法量〉

像高 34.0 cm（現状） 髪際高 28.3 cm
面長 5.2 cm 面幅 4.5 cm（本面） 面奥 5.0 cm

(本面)

胸厚 6.6 cm 腹厚 6.0 cm 肘張 11 cm

最大幅 (両脚部の張り) 16.6 cm

〈形状〉

六面六臂六足で水牛に跨る姿を当初はあらわしていたと考えられる。面貌などの詳細は不明瞭だが、頭部は本面の左右に脇面をそれぞれあらわし、本面頭上に残り3つの頭部を個別に配置する。本面は天冠台をあらわし、天冠台下の髪が左右に焰髪であらわされる。耳は現状確認できない。頸に括りをあらわらす。真手は腹前あたりで印(「檀陀印」か)を結んだものと思われるが現状では表面が欠損しており指の仕草までは判断できない。条帛(左肩をわずかに露わにする)、腰布、裙を身につけ、裙は膝上まで捲れあがる。6本の足はすべて下ろして水牛に跨る姿であらわされる。

〈品質構造と保存状態〉

ケヤキ材の一木造。内割りなし。頭体幹部を一材から彫出し、この体幹部材に左右の腕、計2本分の腕を肩先から矧ぐ構造か。現状、左右脇手(計4本分)については肩以下を欠失する。また、当初の乗り物と考えられる水牛座も失われている。脇面や足先なども朽損により欠失する部分が見られる。表面は素地を呈し、彩色などの痕跡は確認できない。また不動明王と同様に朽損・虫損が著しく、樹脂含浸が施されている。

③ 名称未詳明王形立像【写真13~16】

〈法量〉

像高 36.7 cm (現状) 髪際高 31.6 cm

頭頂-顎下 10.2 cm 面幅 4.9 cm 面奥 6.1 cm

面長 5.2 cm 耳張 5.6 cm

肘張 13.7 cm 胸厚 6.2 cm 腹厚 6.0 cm

〈形状〉

一面多臂の明王形立像(恐らくは四臂像かと考えられる)。垂髻を結び、残る髪を束状の焰髪として逆立てる。天冠台をあらわし、その正面上には何かの標識かあるいは冠飾をあらわすようであ

る。面貌は両目を見開き、口を結ぶ瞋相か。耳朵は環状で貫かない。頸・胸部に括りをあらわす。条帛(左肩部をわずかに露出する)・腰布・裙を身につけ、裙は膝上まで捲れあがる。真手の持物は失われているが、右手は右脇腹のあたりで拳を握り、左手は左腰脇のあたりでやはり拳を握り、現状は細い棒状の物(残存部)を持つことが確認できる。左足を伸ばし、右足を曲げて立つ蹶起の姿をあらわす。

〈品質構造と保存状態〉

ケヤキ材の一木造。内割りなし。頭体幹部を一材から彫出し、この体幹部材に左右脇手を彫出する別材を矧ぐか。現状、左右脇手は欠失する。また、真手の手首以下の部分、右足部分、左足の足首以下を欠失し、像表面も部分的に欠損箇所が散在している。先の2像と同様に表面は素地を呈し、彩色などの痕跡は確認できない。また、同じく朽損・虫損が著しく、樹脂含浸が施されている。

2. 不動明王坐像と大威徳明王像について

その形状から尊名比定が確実な2体について、特にその像容を中心に筆者の所見をまとめてみたい。

① 不動明王坐像

不動明王坐像は、頭頂部に蓮花を載せるための角柄を残すが、どうして同じ頭体幹部材から蓮花を彫出しなかったのか疑問が残る。しかし、例えば、本像より制作年代が遡る奈良・円證寺の不動明王坐像(10世紀)のように頭頂部に角柄の突起部を残す作例が見られることから、あえて頭頂部の蓮花(いわゆる「頂蓮」)や莎髻などを別材で造形化する意図が存在したのかもしれない。

また、辮髪遊離部が欠失しているために詳細は不明だが、頭頂部付近から垂下する髪束を捻っていることは現状でも確認できる【写真17】。ヘア



【写真 17】 不動明王坐像（頭部）

バンド状の髪飾りは確認できないが、条帛垂下部の形状がやや三角形を呈して見られる点からも、この不動明王坐像が中央では10世紀後半から流行が見られるいわゆる「三井様」や「円珍様」と呼ばれる不動明王の姿の一つのモデルとして制作されている可能性が伺われ、その情報が地方作の本像にも受容されていることが伺える⁹⁾。

不動明王坐像は、頭部の比率の大きな童子形を意識した造形がなされており、正面観や背面観の印象では11世紀頃に位置づけられるようにも思われるが、側面観の奥行きが薄い。これは大郷町教育委員会が管理する別の菩薩立像にも見られ、やはり平安時代後期でも12世紀の作品と位置づけるのが妥当ではないかと考える。

② 大威徳明王像

大威徳明王像は、一般的な「檀陀印」なのかどうかは欠損しているために確定はできないものの、少なくとも真手は印を結ぶ姿であったと考えられる。この点から、大威徳明王像に関しては、円珍請来「五菩薩五忿怒像」にあらわされる真手に弓矢を持つ姿ではないことは指摘できる。京都・大覚寺の五大明王像（1176年）のように、不

動明王の表現に「円珍様」を取り入れる五大明王像の大威徳明王像が、必ず円珍請来「五菩薩五忿怒像」に対応する図像で造形化されるわけではないので、この点は特に問題ないだろう。

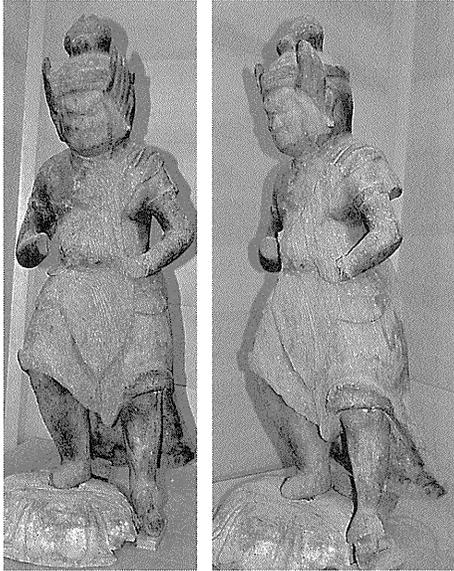
この大威徳明王像の造形上の特徴は、①6つ頭部を個別に表現する点、②条帛左肩部分においてわずかに肩を露出する点、③六足をすべて下ろして水牛座に坐する点の3点があげられる。現存する大威徳明王騎牛像の遺例の中で、本像に近い像容の作例には、奈良・唐招提寺像（11世紀）があげられるが、唐招提寺像の六面の表現方法は、下に位置する三面の頭上に一面ずつ配置する形式であるのに対して、本像では頭上の三面は、本面の頭上に三面を別々に配置する点では違いが見られる。

また、②の点については、次に取り上げる名称未詳明王形立像にも確認できる表現であることから、この2体がまとまった群像であった可能性を示唆する表現として捉えられる。不動明王坐像については、辮髪の下端と思われる部分が肩の部分にあらわされているために詳細がつかめないが、条帛は恐らく同種の表現がなされていたものと考えられる。

3. 名称未詳明王形立像の尊名について

問題は、残る1体の尊名同定である。先にも記したように、この像は不動明王、大威徳明王とともに一連の作品と考えられることから、恐らくは五大明王として一群を形成した尊像の1体であったものと考えられる。

一般的な五大明王の組み合わせから考えた場合、残る尊像は、降三世明王、軍荼利明王、金剛夜叉明王（あるいは烏樞瑟摩明王）のいずれかである。これらは本像と同様に一面多臂の姿であらわされる可能性があるが、本像の真手は、両手とも腰脇あたりで何か握るような仕草であらわされ



【写真18】滋賀・世代閣に安置される名称未詳の四臂明王形立像

ることから、この両手を絡めたり、交差させたりして印を結ぶ姿であったとは考えがたい。この点から、ほとんどの作例で真手は根本印を結ぶ降三世明王と軍荼利明王は選択肢から外れ、残る金剛夜叉明王か烏樞瑟摩明王の可能性が高いように思われる。

実は、滋賀・世代閣に保管されている2体の明王像のうちの1体【写真18】にも本像のような姿の作例が存在する。この像は現在「蔵王権現」として紹介されているが、本来は四臂の姿であったと考えられることから、一般的に言う蔵王権現とは考えがたく、何らかの明王像としての尊名を特定する必要があるように思われる。

国内の現存最古例である東寺講堂像をはじめ、金剛夜叉明王は三面六臂⁷⁾の姿が彫像・絵画ともに多いが、埼玉・黒岩五大尊像や兵庫・城崎温泉寺像、奈良・西大寺の文殊菩薩騎獅像(正安4年〔1302〕)に納入されていた「九重守」(弘安8年〔1285〕)にあらわされる五大明王のうちの金剛夜叉明王のような一面多臂の異形像も国内の作例に

は存在する。また、海外の作例には、統一新羅時代の金剛夜叉明王(国立慶州博物館所蔵)に一面四臂の姿が報告されている⁸⁾ことから、金剛夜叉明王には一般的な三面六臂像以外にも実際にはヴァリエーションが存在することがわかる。このような点から、一面四臂像と考えられる本像も金剛夜叉明王の1つの姿である可能性が考えられる。

また一方で、烏樞瑟摩明王を候補にあげることも可能である。例えば、『烏樞瑟摩明王図像』の中には本像のような蹶起の姿ではないものの、真手の仕草が本像と近い白描図像が見られる【写真19】⁹⁾。本像の場合、現状の残存部から左手に何か細長い持物を持っていたことが伺え【写真20】、真手の左手が金剛杵(形状の長い金剛杵)、右手が斯剋印をあらわす一面四臂の烏樞瑟摩明王を五大明王の北方尊として造形した事例である可能性も考えられる。先の金剛夜叉明王像と同様に韓国・東国大学校慶州キャンパス博物館所蔵の石塔塔身には一面四臂の烏樞瑟摩明王と同定されている尊像があることから¹⁰⁾、本像もこのような図像の流



【写真19】『烏樞瑟摩明王図像』に収録される烏樞瑟摩明王



【写真 20】名称未詳明王形立像の持物

れを汲む烏樞瑟摩明王の一例と捉えられるかもしれない。

本像の場合、尊名同定の鍵となる両手の仕草や持物が失われているため、確証はないものの、この尊像が五大明王を構成する1体であった場合、その北方尊像のいずれかとして制作された明王像ではなかったかと考える。

4. 3体の明王像の制作背景について

これら3体の明王像は、鶉崎にある薬師堂の軒下から発見されたものであることは確かだが、本来の出所の情報は明確でなく、造像当初の正確な安置場所を知ることは現状では不可能である。

『大郷町史』に記されるように、この地域にも廃仏毀釈の影響が及んでいることから、周辺の寺堂あるいは神社に安置された尊像が処分を免れて薬師堂に伝わった可能性も考えられる。特に明王像は、資料からも薬師堂に安置された可能性が指摘されている¹¹⁾ その他の菩薩像2体、僧形像1体と比べても規模が小さく(写真1参照)、また、そも



【写真 21】城崎美術館安置の2体の明王像(左)降三世か(右)金剛夜叉か

そも制作当初から比較的大らかな造形がなされた尊像であったと考えられる。

このような小規模な五大明王の遺例は、兵庫県の城崎温泉寺(現・城崎美術館安置)の降三世明王と金剛夜叉明王と思われる2体の明王像【写真21】にも見ることができる。城崎温泉寺の2体も、本稿で取り上げた3体も造形の完成度は決して高い作品ではなく、黒川郡と地域的にも近い松島五大堂像のように一堂の中心的な本尊として安置された尊像とは捉えがたく、またその造像背景・環境も大きく異なるものと捉えられる。本稿では一つの可能性として、3体の明王像がこの地域における験者の活動とその宗教儀礼の中で制作され、祈りの対象とされたような尊像ではなかったかと考えておきたい。

おわりに

現在、東北地方において平安時代の五大明王の彫像作例がまとまった形で残るのは宮城・瑞巖寺(松島五大堂)像、岩手・正音寺像(不動を除く四明王立像)くらいであり、本像は東北地方に波及した五大明王信仰の一つの姿を知る遺例である。

地方の作例の中には、一般的な作例とは異なる特殊な造形を示すものも多いが、それを単なる異形像として扱うのではなく、その異形性の中に積極的な造形上の合理性、特異な造形が生まれた精神性を見出すことで、地域に生きた人々の信仰や社会の姿を捉えていけるのではないかと思われる。

本稿で取り上げた作品は、欠失や朽損が多い作品ではあるが、中央の宗教文化を携えて地方に移動した人々の移動経路や各地域における土着化など捉える資料として、残されるべき地域の貴重な文化遺産と言える。

本稿は、主に現状記録を目的とし、名称未詳の1体について若干の私見を提示した。作品そのものの朽損に加え、尊像の来歴など周辺情報が限られる分、十分な検討には及ばないが、本稿が地域資料の記録・保存と今後の活用に何かしらの役割をなせたら幸いである。

(付記)

本稿執筆のための調査にあたり、2012年3月16日の調査では日本学術振興会の科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成を、同年8月23日の再調査・撮影では椛山女学園大学学園研究費(B)の助成を頂き調査を行いました。記して御礼申し上げます。

また、調査・撮影にあたりお世話になりました宮城県大郷町教育課(生涯スポーツ係)主幹 布施谷忠夫様、宮城県大郷町教育委員会教育課課長

補佐 熊谷有司様、聞き取りにご協力頂きました高橋辰雄様には記して御礼申し上げます。

なお、本稿掲載の写真は、【写真19】を除き、筆者調査時に撮影したものです。

注

- 1) 大郷町史編集委員会編『大郷町史』(1982年)
- 2) <http://blog.livedoor.jp/coralsiba/archives/2011-08.html>
- 3) 東日本大震災復興祈念 仙台市博物館開館五〇周年特別展『仏のかたち 人のすがた 仙台ゆかりの仏像と肖像彫刻』(仙台市博物館、2011年)
- 4) 筆者は、2012年3月16日と同年8月23日に調査・撮影を行った。
- 5) 先掲註3図録解説には、安永3年(1774)の書出に、薬師堂の本尊・脇仏がすべて木仏立像の古仏であったことが記されていると指摘されている。また、聞き取り調査により僧形像が薬師如来と呼ばれていたことを記されている。
- 6) 宮城県下における「三井様」、「円珍様」を受容する例には、登米市の大徳寺(横山不動尊)像があげられる。
- 7) 三面六臂像でも眼の表現には、すべての顔を五眼であらわすもの、本面のみ五眼とし、脇面は三眼とするもの、すべて三眼であらわすものなどのヴァリエーションが存在する。
- 8) 津田徹英「統一新羅時代の八大明王をめぐる」(研究代表者 朴亨國『韓国の浮彫形態の仏教集合尊像(四仏・五大明王・四天王・八部衆)に関する総合調査』、平成16年度～平成18年度科学研究費補助金 基盤研究(B)海外学術研究成果報告書、2008年)
- 9) 大正図像6 293頁。
- 10) 先掲註8論文。
- 11) 先掲註3図録解説。

みた・たかあき / 文化情報学部講師
E-mail: t-mita@sugiyama-u.ac.jp



【写真3】不動明王坐像（正面）



【写真4】不動明王坐像（左斜側面）



【写真5】不動明王坐像（右側面）



【写真6】不動明王坐像（背面）



【写真7】不動明王坐像（右斜側面）



【写真8】大威徳明王像（正面）



【写真9】大威徳明王像（背面）



【写真10】大威徳明王像（右側面）



【写真11】大威徳明王像（左側面）



【写真 12】大威徳明王像（上半身）



【写真 13】名称未詳明王形立像（正面）



【写真 14】名称未詳明王形立像（左斜側面）



【写真 15】名称未詳明王形立像（右側面）



【写真 16】名称未詳明王形立像（背面）